

「臨地実習指導者研修セミナー2015」評価：目標達成度と自由記述に焦点をあてて

著者	吉田 文子, 清水 千恵, 中澤 淑子, 橋本 佳美, 鈴木 千衣, 八尋 道子, 征矢野 あや子, 吉川 三枝子, 吉田 和美, 堀内 ふき
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌
巻	8
号	1
ページ	91-99
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000182/



活動報告

「臨地実習指導者研修セミナー 2015」 評価：目標達成度と自由記述に焦点をあてて

Evaluation of 2015 Nursing Practicum Instructor Seminar (NPIS):
Focus on Attained Objectives and Free Comments

吉田 文子 清水 千恵 中澤 淑子 橋本 佳美 鈴木 千衣 八尋 道子
征矢野 あや子 吉川 三枝子 吉田 和美 堀内 ふき

Fumiko Yoshida, Chie Shimizu, Yoshiko Nakazawa, Yoshimi Hashimoto,
Chie Suzuki, Michiko Yahiro, Ayako Soyano, Mieko Yoshikawa,
Kazumi Yoshida, Fuki Horiuchi

キーワード：臨地実習指導者，研修プログラム，評価

Key words : Practicum instructor, Educational program, Evaluation

Abstract

The purpose of this report is to evaluate the 2015 Nursing Practicum Instructor Seminar (NPIS) using questionnaires from participants. Forty-one nurses attended the full NPIS, and 100% (41) questionnaires were returned. 95.1% to 97.6% of the nurses met the objectives of the seminar. The level of satisfaction for all nine sessions was 97.6% (40). In addition, 97.6% reported that the NPIS was motivating for their teaching to student nurses. Thus, the overall evaluation of the NPIS by the nurses was that it was a success. Some topics were suggested through their free comments for the NPIS of 2016.

要旨

本報告は、「臨地実習指導者研修セミナー2015」実施後の受講者に行ったアンケート調査の結果を「セミナー目標の達成度」と「自由記述」を基に評価したものである。全プログラム修了後にアンケート調査を実施し、41人(回収率100%)から回答を得た。セミナー目標である「自己の教育観」、「指導者の役割」、「指導のポイント」の達成度は、95.1%～97.6%であった。本セミナーへの満足度と指導へのモチベーションに対しても97.6%が満足、向上したとしていた。感想を自由記述したものからは、方法、内容、進行上の提案について次年度の企画への示唆がいくつか得られた。

受付日 2015年12月19日 受理日 2016年1月28日
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

I. 緒言

「臨地実習指導者研修セミナー」として実施の企画も今年度で5回を終え、参加者はこの5年間で述べ204人(平成23年43人、平成24年32人、平成25年46人、平成26年42人、平成27年41人)となった(吉田ら, 2012, 2013, 2014, 2015)。平成26年には、看護管理者を対象に、例年の指導者向けセミナーの紹介用として看護管理者版を作成し実施した。これは、指導者が体験している3日間のプログラムの特徴と概要を2日間にまとめて看護管理者にも体験してもらう趣旨であるが他方では、今後におけるプログラム開発への課題も見出す機会とした。修了後のアンケートでは、89%~100%の範囲で、今後とも現行プログラムが継続されることを望み、また、全員が「指導者へこのセミナーを勧めたい、指導者への支援方法がわかった」としていた(吉田ら, 2015)。

そこで、今年度は現行プログラムを実施するにあたり、これまでの実施経験をふまえ、内容のより充実を図ることとした。実施経験から受講者は、自己の経験から課題を見出し解決することによって学習するというアンドラゴジー視点での学習(Knowles, et. al., 1998)を好むことが考えられた。その特徴を生かしたプログラム構成として、プログラム最初の導入では講義セッションの直ぐ後に演習セッションが始まるようにした。これら変更をふまえ、本報告は、今年度セミナー修了時に受講者から得たアンケートの「目標達成度の評価」と「自由記述」を手掛かりとして、今年度のプログラム構成の評価を行うことを目的とする。

II. 今年度「臨地実習指導者研修セミナー」の概要

1. 受講対象者への呼びかけ

本学の実習受け入れ先ならびに卒業生就職先の施設代表者へ参加を募った。

2. プログラム

- 1) 8月最終週の3日間を設定した。(表1)
- 2) 例年の演習で最も関心が高かったセッションを導入直後のセッションとした。
- 3) 学びの過程で生じる全てを歓迎し、自分を躊躇なくさらけ出せると感じる「場(学習環境)」を提供するように努めた。そこで受講者には①学びの過程として自然に生じる失敗を安心して体験できる場であることと、②それを実現するルール(他者の発言を失笑しないなど)があることを伝えた。

3. 各セッション(講義・演習)の内容

- 第1セッション「看護教育の目的と方法」では、ICNの看護学教育の目的を確認するとともに、受講者のこれまでの教育観・学習者観を‘ふりかえる’機会とした。また、このセッションは導入のセッションとなるため、アイスブレイキングを入れて始めた。
- 第2セッション「実習記録のコメント(演習)」では、学生の経験を掘り起こすツールとしての「実習記録」を活用した指導方法について考える機会とした。演習事例の「実習記録」に各自でコメントを記入した後、グループ討議を行い、受講者間で各自の教育観や指導の在り方を共有した。同時に学部看護学生のレディネスについても情報共有した。
- 第3セッション「看護倫理」では、専門職としての看護師が倫理的感受性を持つことの意味と「看護師の倫理綱領」を解説した上で、学生が体験しやすいジレンマケースを用い

表1 プログラム

8月25日(火)	9:00- 9:10	挨拶	竹尾恵子
受付 8:30~		オリエンテーション	
2200 教室	9:10-11:10	看護教育の目的と方法	吉田文子
	11:20-15:00	実習記録のコメント(演習) (昼休憩1時間含)	鈴木千衣
	15:10-16:40	看護倫理	八尋道子
	16:50-17:30	2日目の課題説明とビデオの視聴	橋本佳美
26日(水)	9:00-12:00	看護観の再構築	鈴木千衣
2200 教室	11:10-12:40	交流会	清水千恵、中澤淑子
	13:30-15:00	キャリアビジョン	吉川三枝子
	15:10-16:10	より効果的な指導と指導者の役割	吉田和美
	15:40-15:50	キャンパスツアー(図書館) 司書:佐藤	
28日(金)	9:00-10:30	本学のカリキュラムの特徴	堀内ふき
2200 教室	10:40-12:00	キャンパスツアー(実習室等) (昼休憩)	中澤淑子、清水千恵
	13:00-14:30	実習要項をふまえた指導のありかた(演習)	征矢野あや子
	14:40-16:40	教育観の再構築	吉田文子
	16:45-16:50	アンケート	
	16:50-17:30	修了証授与	宮地文子

て倫理的課題の明確化とその解決の仕方について、枠組みを用いて対話しながら学べるようにした。

- 第4セッション「看護観の再構築」では、「自身の看護実践エピソード」を、グループメンバーに伝える(共有する)ことから始めた。互いに質問をするなどの過程によって、個々の看護実践を分かち合い、日々の看護で何を大切に実践しているのかをふりかえり、グループごとに結果を発表した。
- 第5セッション「キャリアビジョン」では、目標を受講者のキャリア開発支援とし、各自の自分史をキャリア開発として改めてふりかえる体験と、今後のキャリア開発・形成への方法の在り方を提供した。
- 第6セッション「より効果的な指導と指導者の役割」では、臨地教育の目指す学力が学生に培われるための指導者の役割、指導

者と教員の協働について、学生の立場を迫体験し(ワークシート活用)、考えを深める機会とした。

- 第7セッション「本学のカリキュラムの特徴」では、看護学教育の現状とその行方を歴史的見地から概観し、指定規則に留まらない学士課程教育のねらいや今後の大学における看護系人材の育成のあり方を本学カリキュラムの特徴と併せて説明した。
- 第8セッション「実習要項をふまえた指導のありかた(演習)」では、実習要項の使い方を事例から確認できるようにした。事例文を短くし、受講者が自由に自身の考えを述べあう、グループ討議とそのまとめを発表、発表時には講師がタイピングして、内容を可視化(共有化)できるようにした。
- 第9セッション「教育観の再構築」では、教育評価・評価者バイアスの観点から実習目

標の明確化が必要であることや、学習者は評価者によって学習行動を変化させてしまうことを説明した。続いてセミナー初日の自身の「教育観」を現在のそれと照らし合わせ、あらためてふりかえり、再検討し、各自が自己の「教育観の再構築」を図る機会とした。

Ⅲ. 受講者アンケートの実施と結果の考察

1. アンケートの実施方法

アンケートへの協力依頼は、3日間の全プログラム終了時に受講者全員に対して呼びかけた。アンケートの目的を口頭で説明し、趣旨に賛同が得られる場合は、その場で記入をお願いし、会場出口に設置した回収箱に入れてもらうようにした。なお、アンケートは連結不可能匿名化で実施した。

2. アンケートの構成

設問は、セッションごとに「参考になったか」を尋ね、さらにセミナー目標の到達度についても調査した。

回答方式は、Likert scale(1 to 4)【1-思わない】【2-あまり思わない】【3-やや思

う】【4-思う】とし、一部自由記載による回答を求めた。

3. アンケートの結果と考察

回収率は100% (41枚)であった。

1) 各セッション (講義・演習)

9つのセッションを通して、「参考になった」「やや参考になった」は、70.7%~100%で推移していた(図1)。第5セッション「キャリアビジョン」と第7セッション「本学のカリキュラムの特徴」は、昨年の看護管理者からの回答と比較(吉田ら, 2015)すると約20%低かった。

第5セッションは、本セミナーの受講者が中堅期(proficient stage)に相当する看護師(Benner, 1982; 2012)であり、同僚や学生指導にあたる立場であると同時に、自身のキャリア転換期にあたるため、各自のキャリア開発を支援するためのセッションとして設けている。また、第7セッションは、指導者の学生指導の際の一助となるよう、看護系人材養成機関である本学のカリキュラムの特徴を事例に交えながら、看護と看護学教育の刻々と変化発展を遂げる今日の動向を歴史的にも解説するセッションとして設けられており、受講者の7割強がその意義を感じている。中堅

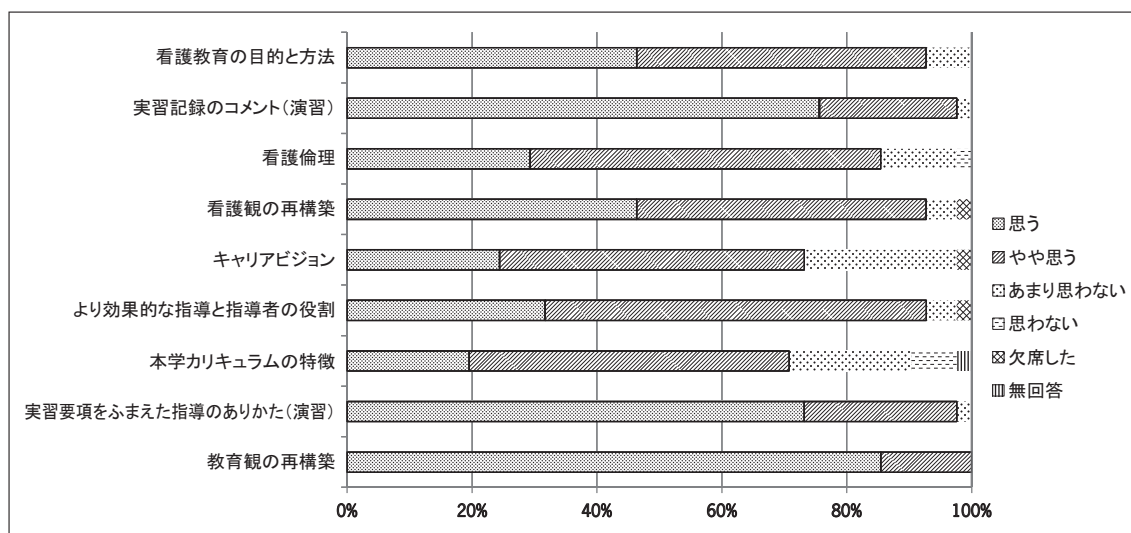


図1 各セッション(講義・演習)

期の学習方法は、講義のような形式知が看護実践をよりよいものにする(大串, 2007)ことから、講義の継続をすると同時に、次年度「本学のカリキュラムの特徴」が「参考になった」とする受講者に対して、どの部分がそうだったのかを尋ねることを行ってみよう。

他方、演習のセッションとして設けた第2セッション「実習記録のコメント(演習)」、第8セッション「実習要項をふまえた指導のありかた」では、「参考になった」「やや参考になった」は97.6%(40人)と際立って高かった。これは、受講者にとっての指導上の課題である事例をグループ学習する過程が受講者のレディネスに合わせて進められ、そのグループ風土が各自に、概念や原理を見出す発見学習(杉森, 2012)の流れとして肯定的に機能したからではないか、と考えられた。

2) 目標到達度、セミナー満足度、指導へのモチベーション

本セミナーでは3つの目標、①自己の「教育観」をより明確にすることができる。②実習指導者の役割について深く考えることができる。③臨地実習における指導方法のポイントを知ることができる、を掲げたが、これらの目標達成について受講者は、「思う」「やや思う」が95.1%(39人)～97.6%(40人)と回答し他方、セミナー満足度では、「総合的に満足できるものであった」

足できるものであった」は「思う」「やや思う」が97.6%(40人)であり、目標到達度の高さとの高い関連がうかがえた。さらに、指導へのモチベーションでは、「指導へのモチベーションをさらに向上させることができた」が97.6%(40人)であった(図2)。

受講者の殆どが目標を達成しているため、今回の9セッションとその進め方は今後も継続が望ましいと考えられた。また、今回初めての問いであった「指導へのモチベーション」は、目標到達度と関連が強いことが示唆された。総括すると、本セミナープログラムは、「目標への到達度」を高めかつ、「指導へのモチベーション」も高まることにより、受講者に高い達成感をもたらすものであることが分かった。

3) 交流会・キャンパスツアー

2日目の昼食時間に交流会として、各グループに教員1～2名が入り、情報交換の場を持ちその際、実習室での学生の演習光景をビデオ映像で紹介した。

また、キャンパスツアー(実習室)では、室内に実習教材をモデル展示して直接触れられるようにした。さらに、キャンパスツアー(図書館)は任意参加とし、館内のラーニングコモンズではPCを1人1台使用し、文献検索の実際についてのガイダンスを実施した。

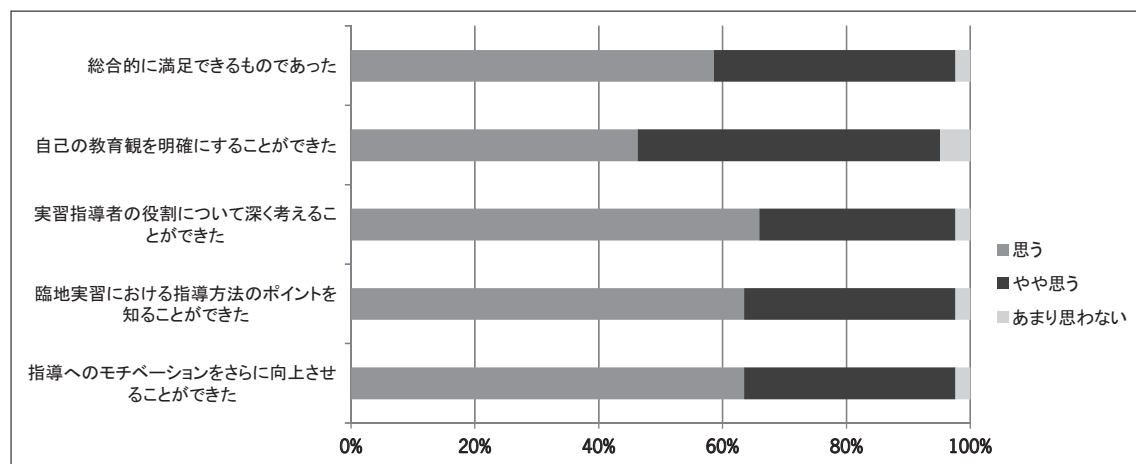


図2 目標達成度、セミナー満足度、指導へのモチベーション

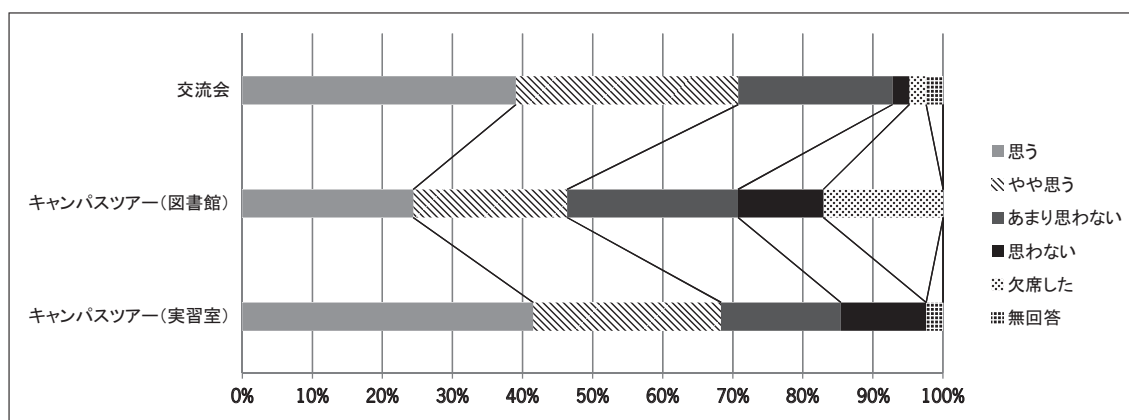


図3 交流会・キャンパスツアー

これらの企画につき、このセミナーで今後も企画したほうがよいかを尋ねた。交流会については、「思う」「やや思う」が、70.7%、「あまり思わない」は22%であった(図3)。これは過去の交流会の回答に比べ10%~15%低くなっており(吉田ら, 2013, 2014)、交流会内容への受講者の期待が変化していることも考えられ、検討していく必要がある。

キャンパスツアー(実習室)(図書館)についても過年度の80%から減少している。しかし、受講者の半数以上が継続を希望していることから、今後も図書館ツアーは任意参加として継続すべきかと考える。

4) セミナー体験後の感想の自由記述

セミナー体験後の感想について自由記述を求め、①受講者の手書きの文章をすべて、エクセルに原文のまま入力し、②記録単位とするために、長文は一文一義の成文記録とし、③それに文体の常体修正を施して得たものをさらに、「方法」、「内容」そして今後への「提案」に区分けし一覧にしたものが「表2」である。なお、これら一連の作業を通して、受講者各位が個々の場面でまた、場面の状況の中でそれぞれに体験された想いを改めて、身近に感じた。

「方法」についての記述は、31記録であった。「3日間は学びの多い・充実したものになる」の9記録が最多で、次は「グループワークは、

経験者と話し合いができ、今後の指導に生かせる内容になる」の6記録であった。他には「先生方が気さくに話しかけてくれることが楽しさにつながる」をはじめ、「講義と演習の組み合わせや修了書授与」等に触れた記録があった。本セミナーは例年3日間で企画し、プログラムは講義と演習の組み合わせで構成している。講義で得た形式知を身体的知識としての暗黙知(大串, 2007)として獲得することを願っているためである。その暗黙知の体験には、グループワークが欠かせず、グループ内の斉一性の原理(Broun, 1988/1993)を働かせるためにはグループ形成のための時間が必要になる。なお、過年度の本セミナー調査報告(吉田ら, 2014)では、グループの凝集性をグループワークの2回目以降(2日目)で感じているとされ、メンバーが協力し課題遂行にエネルギーをかける課題遂行期は、2日目の後半から3日目にかけてであり、今回セミナーでも、この3日間があつてこそ、グループワークが実り多いものになると推測された。また、本セミナーでは修了証を手製印刷し、お疲れ様でしたの意を込めて、最終日に一人ひとり手渡ししている。この修了証に感激を得た背景には、これまでの3日間の集大成をご自身で感じ取られたのではないかと推測され、なにより企画側としては嬉しいコメント記録であった。

表2 感想の自由記述

記録単位=123

項目 [記録数]	原文の文脈から意味を抽出(deriving)後、文体を常体へ修正した
方法 [31]	1 3日間は学びの多い充実したものになる (9)
	2 グループワークは、経験者と話し合いができ、今後の指導に生かせる内容になる (6)
	3 教員が気さくに話しかけてくれることが楽しさにつながる (3)
	4 講義と演習を行うことでふりかえりができ学びが深まる (2)
	5 演習は他の施設の話がきけてよい (2)
	6 心のもった修了証授与は感激する (2)
	7 素晴らしい先生方に講義では大学の授業を少し体験できる (2)
	8 グループワークでは共感でき安心する (2)
	9 大学施設の案内は学生の頑張りようがみえる
	10 大学施設での研修は学生気分になれる
	11 パワーポイントでの講義や資料配付はわかりやすい
内容 [75]	1 学生への関わりがこれでよかったという点と、不足している点に気づける (7)
	2 新人指導でも参考になる教育論を学べる (3)
	3 指導や自身をふりかえる機会となり参加してよかったと思える (3)
	4 指導上の悩みへの解決やヒントがもらえる (3)
	5 指導への考え方が大きく変わる (3)
	6 学生がモチベーションを上げる実習を創り上げてみたくなる (2)
	7 今後の指導が楽しみになる (2)
	8 実習要項を見て指導したくなる (2)
	9 自分の指導に自信がもてる (2)
	10 学生としっかり関わっていきたくなる (2)
	11 学生の気持ちに近づける (2)
	12 自分のことをもっと褒めてあげてと励ましてもらえる (2)
	13 できないと思うのはよくないことだと改めて考えさせられる (2)
	14 自分の思いを言葉で伝えることで自分を見つめられる (2)
	15 看護のふりかえりから今後の生き方を考えることができる (2)
	16 学生のレベルに応じた指導の必要性を学べる
	17 指導方法がわかり勉強になる
	18 学生指導に対する考え方が変わる
	19 勉強することは楽しいと感じるようになる
	20 指導への苦手意識が軽減する
	21 倫理観など、自分自身考えられなかったことが考えられるようになる
	22 他の指導者の思い、教員の思いを共有できる
	23 苦痛だった学生指導が自分が少し変って楽しみになる
	24 配付の資料は、つまづいた時の参考になる
	25 教育観などとても充実した内容が学べる
	26 「教育観の再構築」の講義はとても参考になる
	27 看護教育の日米の比較の話は、自分を客観的にみることができる
	28 学生を臨床で大切にしたいと思うようになる
	29 ほめられて教育されていたらもっと伸びたのと思える
	30 指導への負担から、学生と一緒に学んでいけばよいと思えるようになる
	31 学生が責め指導を一番したくなる
32 学生に申し訳ない指導をしていたことに気づく	
33 今後実践できる部分から少しずつチャレンジしてみたくなる	
34 学生を指導する際の自分の接し方で、より良い方向へも悪い方向へも変わることがわかる	
35 初日の印象の大切さや日常生活の中でも大切なことを学ぶことができる	
36 相手を肯定的に受け入れることの大切さをすごく学べる	
37 ほんやりしていた学生指導の方法がはっきりする	
38 学生と一緒に自分自身も学んでいきたいと思える	
39 指導ポイントを把握することができる	
40 他者の看護に対する考え方に触れ、刺激になる	
41 学習意欲が出る	
42 学生が恵まれていて羨ましく思う	
43 過去の研修等で得たことの再確認をする機会となる	
44 「コップの水」の話から、がむしゃらに教えようとしなくてもいいと思え気が楽になる	
45 看護観、教育観についてふりかえる機会となる	
46 学生だけでなく新人、子ども患者などの教育にもいかせるものがある	
47 これからは今までより学生に寄り添った関りができそうな気がするようになる	
48 自ら進んでの参加でなくてもこの研修は、参加してよかったと思える	
49 研修後も教員へ相談してみたいと思える	
50 教員伝えたいことが手に取るように感じる講義内容である	
51 佐久大学には大変熱い教員ばかりということがわかる	
以下提案	
日程 [4]	1 終了時間は16:30がよい (3) 2 セミナーは3日間連続がよい
資料 [3]	3 資料は、英語に和訳をつけてほしい 4 任意提出物の返却方法を考慮して欲しい 5 佐久大学で実際の記録を用いて演習してみたい
演習 [5]	6 看護倫理は演習もやりたい 7 グループワークの考える時間や例題を読む時間を短縮してほしい 8 グループ発表の後の講師総評を多くしてほしい 9 「忘れられないエピソード」を使って討議したかった 10 演習時の質問の意図を明確にしてほしい
講義 [1]	11 「より効果的な指導と指導者の役割」をゆっくり聞きたい
キャンパス ツアー等 [5]	12 キャンパスツアーの時間は短くてよい (3) 13 学生の話聞く機会があるとよい 14 昼食は学食がよい

「内容」についての記述は、75記録であった。最多は「学生への関わりがこれでよかったという点と、不足している点に気づける」の7記録であった。続いて「新人指導に参考になる」「自身をふりかえられる」「指導の悩みへの解決」「考え方が大きく変わる」などがあり、受講者は、3日間、プログラムを体験する中で自らの経験をふりかえていたことがよくわかる記述である。これは、学生や新人への指導上の課題をもとに自らの経験を再構成(Dewey, 1938)していたことを裏付けたものといえよう。また中には「学生がモチベーションを上げる実習を創りあげてみたくなる」や「今後の指導が楽しみになる」、「できないと思うのはよくないことだと改めて考えさせられる」や「勉強することは楽しいと感じるようになる」がありこれらは、受講者が自身のフレームをリフレーミングしたことの表れでもあるといえる。教育にはリフレーミングが欠かせない。人の学習では、往々にして失敗や挫折も体験され、学習者は自己効力感を失いやすい。その時こそ、リフレーミングを行うコーチングが功を奏するだろう。それを今回自ら体験した受講者は、実習指導にあたり、それを暗黙知として活用されることを期待したい。受講者の多くのコメントから、私たち教員はエンパワメントされた。受講者からの感想に感謝したい。

「提案」は、〈日程〉が4記録、〈資料〉が3記録、〈演習〉が5記録、〈講義〉が1記録、〈キャンパスツアー等〉が5記録であった。本セミナーは、将来、単位互換できる日のために、単位時間を優先して3日間組んでいる。本セミナー開設当初は、学習効果を考慮し、意図して週をまたぐ形で実施していた。現在は8月の最終週に、まず2日間連続し、一日空けた3日目を最終日とする計3日間で実施している。これは、講師を担当する教員がこの時期、学会、講師、実習を担当しており、時間調整が難しいことによるもので、連続3日間

実施への課題は大きい、その他の希望提案についても併せて検討していきたい。

Ⅳ. 臨地実習指導者研修セミナー評価と今後の課題

- 1) 9つのセッションの全てで、受講者の7割強が参考になったと回答していた。今後は、どの部分がどのように参考になったのか、を調査することも検討する。
- 2) 受講者の目標到達度は高く、モチベーションも同時に高かった。
- 3) 受講者の学習形態としてグループでの演習は効果的であった。今後は、グループ編成が多様になるような参加者募集の方法も検討する。
- 4) 受講者は指導上の課題をもって臨んでおり、形式知となる講義内容を暗黙知へと転換できるような演習の効果が確認された。そのため、今後も演習を重視しつつ、講義も継続して組み込んでいく。

謝辞

今回アンケートにご協力いただきました受講者の皆様に感謝申し上げますとともに、臨地実習指導者研修セミナーへのご理解と本学の教育へのご理解・ご協力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Benner, P.(1982). From Novice to Expert. The American Journal of Nursing, 83(3), 402-407, ebook version (2012). Lippincott Williams & Wilkins. Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/3462928>
- Brown, R(1988). Group Process: Dynamics within and between groups/黒川正流, 橋口捷久, 坂田桐子訳(1993). グループ・プロ

- セス：集団内行動と集団間行動. 北大路書房.
- Dewey, J.(1938). Experience and Education. New York: Macmillan.
- Knowles, M., Holton, E.F., & Swanson, R.A. (1998). The Adult Learner: The Definitive Classic in Adult Education and Human Resource Development (5th Ed). MA: Butterworth-Heinemann.
- 大串正樹(2007). ナレッジマネジメント：創造的な看護管理のための12章. 医学書院.
- 杉森みど里, 舟島なをみ(2012). 看護教育学(第5版). 医学書院.
- 吉田文子, 堀内ふき, 橋本佳美, 水野照美, 宮崎紀枝, 鈴木千衣, …征矢野あや子(2012). 「臨地実習指導者研修セミナー2011」報告：修了後のアンケートからみた評価. 佐久大学看護学研究雑誌4(1), 59-65.
- 吉田文子, 征矢野あや子, 橋本佳美, 水野照美, 宮崎紀枝, 鈴木千衣, …堀内ふき(2013). 「臨地実習指導者研修セミナー2012」報告：修了後のアンケートからみた評価. 佐久大学看護研究雑誌, 5(1), 31-37.
- 吉田文子, 高木桃子, 征矢野あや子, 橋本佳美, 水野照美, 宮崎紀枝, …堀内ふき(2014). 「臨地実習指導者研修セミナー2013」報告：グループワークがもたらすグループ・ダイナミックスの形成過程とその背景. 佐久大学看護研究雑誌, 6(1), 29-38.
- 吉田文子, 内山明子, 梅崎かおり, 橋本佳美, 鈴木千衣, 八尋道子, …堀内ふき(2015). 臨地実習指導者研修セミナー評価：看護管理者によるセミナー追体験後のアンケート. 佐久大学看護研究雑誌, 7(1), 55-64.